山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要第6号 (1995.3)

生活科における「表現」の教材について　II

石川正一*　　川口政宏**

A Teaching Material of "Expression" in Life Environment Studies　II

Shoichi ISHIKAWA* and Masahiro KAWAGUCHI**

(Received November 21, 1994)

キーワード：生活科、表現、造形、つくり、教材

1　はじめに

山口大学教育学部は平成4年度から「教科教育法生活」と「初等科生活」が開講された。「初等科生活」をコース制にし、「栽培」「飼育」「表現」「影絵」という4コースを設けた。本論文は「表現」コースの教材について、平成5年度の授業について述べる。

基本的な考え方は前年度と大差は無い。しかし、前年度の反省すべき点として、学生の造形的な能力に対する実態の把握が十分で無かったことや、限られた時間や場の中で目標を達成することの困難さ等が上げられた。造形的能力については、学生の作る体験が非常に不足していることを実感できた。本授業は「表現」の領域であり、具体的な活動や体験を言葉や劇、音楽、造形等で表現する事が指導書に述べられている。しかし、生活科の目標である、「具体的な活動や体験を通す」「生活上必要な習慣や技能を身に付ける」ということからすれば、生活の中で実際に体験を通して学ぶことを重要視しており、造形的には「作る」ということに置き換えることができると考えられる。

生活科の「表現」については、本論文での定義は前回行っている。すなわち我々が生命を営む上に派生する「つくり」と考え、我々の衣食住に伴う「つくり」や、生活様式、あるいは社会構造などである。「つくり」とは人間が生存のための作る能力とした。このことは、児童や学生を問わず人間に備わる基本的な能力である。しかし、現在の学力偏重や高度経済成長などによってもたらせられた社会構造は、言語主義に偏り、作る機会は減少傾向にある。我々の周辺を見回したときに自分の作った物を発見することは容易で無くなってきていることからも理解できる。しかし、人間の基本的な能力としてこれを保障していくことは学校教育の今後の課題として考えなければならない。

本コースを選択した学生に小学校時代、理科の教材として水鉄砲をどのように作ったかを質問した結果、3割以上の学生がプラスチックのキットで作ったと回答している。都市の自然環境が竹の入手を困難にしていることなどが、こうした傾向を増加していると予想されるが、物と人間と「つくり」の関係が今日の人間の生存を可能にしたことを考えるな

* 山口女子大学附属幼稚園　　** 山口大学教育学部美術教育

らば、作る人間の意義を十分に吟味することは教育の重要な課題になりうると考えられる。

そこで大切なことは、指導する教師が作る体験を豊富に持っていることであり、このことが生活科の意義をより深く理解する上で必要不可欠である。特に、幼児期や小学校低学年期の作る意義は重要である。想像と創造が一体となって活動する幼児期は、以後の作る活動や人間形成の基礎となりえる。よって教師自らがこの時期の体験の意義を十分理解していることは大切である。

本年度の授業はこのことを重視し、学生自身の生活と「つくり」を一体化した教材を作成することから、次の２点を考慮しながら授業を展開していくこととした。

・学生が作る活動を通して、その意義を考えてみること。

・自分の作った物と生活との関係について考えてみること。

また、時間と場の問題は生活科の性質上、今後の大学の授業形態のあり方を含めて多くの課題を抱えているように思われた。この問題については別の機会に述べることにする。

2　授業の計画及び内容について

今回の教材については作ることから自分の生活の中でそれをどのように活用していくのかを問題にした。そのために授業では作る活動を中心に、授業以外ではその活用の仕方を考えさせる事で生活と作りを体験し、それぞれについてレポートすることにした。前年度と異なる事は本授業の対象を常に生活科と結び付けることではなく、学生自身の生活と結び付けることである。前年度の本授業の目標は次のようなものであった。

①　作る体験を通して人間と材料と道具、そして生活との関係を考える

②　小学校低学年までの発達に即した表現について理解を深める

③　遊びと表現との関係について考える

④　造形材料に対する概念を再考する

⑤　自分の生活経験を表現に結び付ける

本年度はかなり異なった目標を設定した。それは次のようなものである。

①　自分の生活と物との関係を考える

②　作る生活とは何かについて考える

③　小学校低学年までの発達に即した表現について理解を深める

④　造形に対する概念を再考する

ということである。

すなわち、授業と自分の生活をできるだけ密着し、具体的な活動を通して体験できることをねらった。そして、体験を通して学ぶことの意義について理解を深めて欲しいという願いも含まれている。

９回の授業計画について表１のプリントを学生に配布した。あらかじめ授業の内容について知らせるこによってコースの選択等に役立つことがねらいである。

選択した学生は４９人（男１４　女３５）であった。本コースを積極的に選択してくる学生は少数であり、そのほとんどが他コースから移籍される場合が多かった。このことは、学生全体として物を作ることへの抵抗感が強いことが伺える。そこで、物を作ることへの抵抗感をできるだけ取り除くことに配慮し、あらかじめ次回の授業内容を予告し、何らかのイメージを抱いて出席できるようにしたり、実際の活動内容については、できるだけ具

表1

作る活動と、できた作品を自分自身の生活の中に取り入れ、人間と作る活動、そして、表現との関係について理解を深める。

第1回　コラージュで小箱作り

身近な素材を利用して、オリジナルな箱を作る。色、形、構成の3要素を組み合わせ。個性を大切にしながら表現活動を楽しむ。

出来た作品は自分の生活の中でいかに利用したかについて考える。

製作過程と作品の利用についてレポートする。

第2回　染色

布と自分の生活について考える。染色することによって生じる個性やイメージの広がりを大切にする。また、切る、縫うなどにより実際の生活の中で利用することを試みる。

製作過程と作品の利用についてレポートする。

第3回　スチレン版画

身近な素材を利用して版画を刷る。色彩の変化に伴う作品とイメージの違いに気付き、自分のイメージに近づけるまで刷る。作品と自分の生活空間がどのように類似しているのかについてレポートする

第4回　色で遊ぶ

水彩絵の具を筆以外の道具を利用して平面構成をする。絵画表現に対する技法や、審美的な感覚を再考する。表現の自由と個性について考える。

第5回　パネル貼り

第4回の作品をパネルに貼ることで、作品の完成度を高めることによる作品の効果について考える。自宅の展示の仕方や展示することで生活空間の違いについて考える。

製作過程につしてレポートする。

第6回　講義　乳幼児から小学校低学年の表現について

平面と立体表現の発達過程について講義する。

乳幼児の実際の作品や活動のビデオから

第7回　スピーチコンテスト　五感を通して得た情報を言葉で表現する。

自分の食べ物の残りを一週間継続して観察し、3分間のスピーチで報告する。五感で受け取る情報を言語表現する。言語で表現できる限界や他の方法との関係について考える。

第8回　Aコースとの交換授業

Aコースの学生には第6回の授業を行う。

第9回　避難訓練　全コース

夏休みの課題

自分の故郷を24カットの写真と文章で紹介する。ただし、客観的な事実のみで表現すること

体的なプリントや資料を配布しながら、手順を説明した上で活動をした。また、どのような場合にも学生の活動を認め、プラス面の評価に徹するように努めた。

また最終のレポートについても次のような予告をした。

①自分の写真と自己アッピール・・・1ページ

②授業内容について作品の製作手順と気づきをまとめ、各自の作品を展示した状態の写真を添えて提出

③夏休みの課題

こうすることで、授業のイメージを持つことと、自分の生活のペースに合わせて様々な問題意識を日頃からもてることができるのではないか、と考えた。

3　教材と実際の授業について

ここでは、2で提示した今回の授業のねらいと教材の関連について基本的な考えについて述べる。

① コラージュで小箱作り

学生が物を作る事にたいする抵抗感を少なくするためにまずはコラージュによる小箱作りを行った。この教材は日常生活の中で廃材として捨てられてしまうティシュペーパーの箱とグラビアを利用し、自分の生活に役立つ物を作る。この活動では材料用具や手順などについて解説したプリントをあらかじめ配布した（表2）。

この中で考慮した事はやさしい技法で誰でも抵抗無く作ることができることと、出来た物をどのように使うかを生活の中で予想させながらイメージを膨らませて作ることを大切にした。学生は箱とはしさみを用意してもらい。グラビアと糊はこちらで準備した。グラビアに関しては無作為に選択するのではなくある程度色彩や構図などにセンスの感じられるものを提供したいことと、学生によって準備に困難を生じる可能性があることを考慮したためである。このことは、作る第一歩として作品に関して充実感や満足感を味わわせたいという願いがあるためで

表2

用意するもの
　空き箱（ティシュペーパーなど）
　グラビア　はさみ　洗濯のり
活動内容
・グラビアを見比べ、自分でセンスが良いと思うものを選ぶ
・グラビアの中から自分の好きな写真や図柄を切り取る
・切ったグラビアを箱の外側に貼る。内側に白い模造紙を貼る。
・水テープで縁取りをする
＜考えてみよう＞
・なぜセンスがいいと感じるのか
・水テープで縁取りする前後の作品のイメージの違いは何故？
・どんなものを入れる箱にするか考えよう
＜グラビアの貼り方＞
　紙を貼る場合、洗濯のりかデザインボンドを使用するとよい。
　洗濯のりを使用した場合、手早くのりを広げ、貼ったら真ん中から十字の方向に、そして四隅に向かってななめに空気を抜く。真ん中から外に向かって貼るようにする。のりを付けた時に紙が水分を含むために伸びるが、乾くと再び収縮するので、多少のしわは、伸びる。しかし、空気はなるべく抜くようにする。
　デザインボンドを使う場合はかなり広範囲にのりが飛び散るので新聞紙などを周囲に敷いて使用するようにする。
　紙はあまり伸びないが、なるべく手早くすると良い。
＜水テープの貼り方＞
　のりの部分に水を付けると粘着力がでる。
　通常写真のパネル貼りなどに使用する。
　小箱などの製作の場合は、手が乾いている状態の時に貼る部分の長さにあらかじめ切っておく。
　また、濡らした布（軽く絞った程度）は必ず用意して置く。
※注意
　濡れた手で水テープを持たない。
　水気や湿気のあるところには決して置かない。

ある。また、糊については粘性の弱い洗濯のりを希薄にしたものを使用するためである。最後に縁取りを黒の水テープで行って完成した。水テープは全員に購入してもらった。

学生が授業に臨んだ態度は、話しながら周囲の友達と一緒に作ることができ、グラビアを選択するのに熱中したり、貼り方に工夫したり、出来た箱に命名するなど始終楽しい雰囲気であった。ほとんど90分で完成したが、途中で持ち帰った学生もいた。

② 染色

布という素材は人間の基本的な生活の「衣」にとって不可欠な素材である。また、布は日常生活の中で我々が加工して利用できる素材としても親しみやすい。そこで、布と染色について考え、その簡単な技法を理解するとともに、染色した布を加工して自分の生活に利用することとした。

写真１

今回使用した染料は市販のインド藍であり、45センチメートル四方のの綿布に簡単な小石と輪ゴムで絞り染めを行った。絞りの工夫による模様について解説し、染色の手順については市販の説明書に沿って行った。

絞る過程で様々な工夫が見られたが、最も学生が喜んだのは藍液に付けた後に取り出し、緑色が酸化することによって藍色に変化する場面や、水洗後のゴムを取り除いた後で模様が出来ている部分であった。ほとんどの学生が90分で完成した。ただし、乾燥は各自が持ち帰って行うことにした。

③ スチレン版画

スチレン版は魚のトレイなどとして我々の生活に身近な素材である。しかし、石油製品として再処理にはやっかいな素材である。この素材を利用して版を作る。鉛筆で多少力を加えて描くだけで完成。油性の版画インクをローラーで付けて紙で写し取ればできる。ここでは特に混色を体験し、自分のイメージに合った色を作るまで挑戦した。版画の特性でもある一つの版で何枚も刷れることから、色の違いが作品のイメージを変えることに気づき、自分のイメージを探すことを体験する。

④ 色で遊ぶ

⑤ パネル貼り

水彩用具の基本的な使い方と、それぞれの役割について説明した。特に絵の具、水、筆の性質や構造的な原理について解説をした。そして、Ｂ２版の紙に空気で描く絵に挑戦した。すなわち、筆などを使わず絵の具を直接紙に吹いたり（吹き絵）、落としたり（たらし絵）などすることで、表現をしてみようということである。

また、できた作品はパネルに水貼りをし、水テープで周囲を貼り完成させた。パネルに貼ることで、完成度が高くなり、生活の中でも装飾品として利用することが期待できる。

⑥　スピーチコンテスト

夕食の残りを１週間観察する。毎日その変化を記録し、その感想について３分間のスピーチをする。ほとんどの学生は食べ物が腐る臭いに参ったようである。しかし、観察を中止した学生は一人もいなかった。当初は３分の予定であったが、全員が発表できるよう、１分30秒になった。それぞれが、いろいろな思いがあったであろうが、個性的な発表は少数であった。また、科学的な視点で発表した学生が一人いたが、あとは、体験をおもしろくアレンジしようとする学生や２度とやりたくないと締めくくる学生が多かった。私語の多い授業であった。

⑦　乳幼児から小学校低学年の表現について

平面と立体について、その発達について説明。「つくり」の発達については話し合いの形式をとった。具体的な幼児の作品を提示した。

⑧　夏休みの宿題　故郷を24カットで表現する

この課題は前年度も行った。限られた条件の中で表現することは本来難しいように思われがちであるが、実際にはたくさんの規程がある方が表現しやすい面をもっている場合がある。18年間の中で育んだ故郷への思いは実際には個性的で良いのだが、今回は客観的に表現するという課題もあり、悩まされる部分である。

①～⑤までが造形的な活動を中心に行った。誰にでもできる表現活動であり、楽しめたようである。いずれも、作品を自分の生活の中で工夫して使う事を課題にしてあり、今回の授業の中心はここにあるといってもよい。それぞれの作る手順と生活の中で使用している写真をレポートで提出させた。

コラージュの小箱はカセットテープ、ビデオテープ、文庫本、洗濯ばさみ、化粧品、小物などを入れて使用している。また、染色した布は袋、暖簾、テーブルクロス、電気製品のカバー、ティシュ箱を包んだり風呂敷として使用している。版画やパネルはそれぞれ室内の装飾として壁に貼るなどほとんど全員が同じ様な飾りかたをしていた。版画をごみ箱に巻いている学生もいた。⑥活動理由ついて、様々な意見があった。中にはこの活動を環境問題や食料問題まで広げて考えている学生もかなりいた。⑦は予告したがために参加人数が極少数になったようである。

4　授業の感想と作品

生活科の授業でありながら、その前段階である物を作ることへの抵抗感を少なくし、学生が作ることを楽しむまでになって欲しいという素朴な願いから考えた教材である。学生がどのような部分に生活科を感じるのか興味がある反面、安易な理解が生活科の意義を損ねることにならなければよいと思っている。

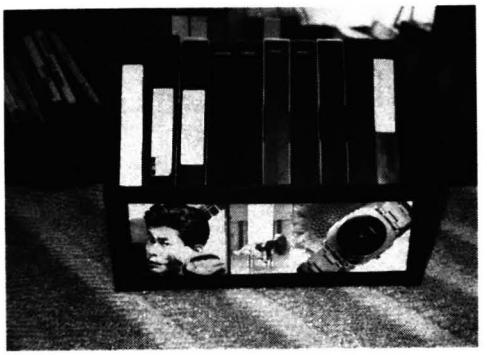
正直言って最初、自分が表現コースに決まったときは「ゲッ！」と思いました。なぜなら。音楽と図画工作は、私の最も苦手な分野なのです。運がわるいなぁ、と思いながら教室を移動した程、嫌でした。

でも、いざ始めてみるとこれがなかなか楽しい！いえ「なかなか」どころか「すごく」楽しめました。失敗がないというか、その失敗さえも作品の表情になってしまうようなものが多く、あまり、ビクビクせずに取り組めました。子どもにとって

もこのような活動は、楽しいものだろうと感じました。退屈しないのが第一条件であると思います。その点、活動が作品として形に残りしかも、自信をもって取り組めるとあれば、これ程、子どもにとって良いものはないと思います。

そして、又、同じ材料、それも数少ない材料で作ったにもかかわらず個性のでる作品になり、自分のものと、友達のものとを比べるなどの活動もでき、展示会などへ発展可能であると思われます。

写真２　コラージの小箱



ー小学校課程　Y．M　女ー

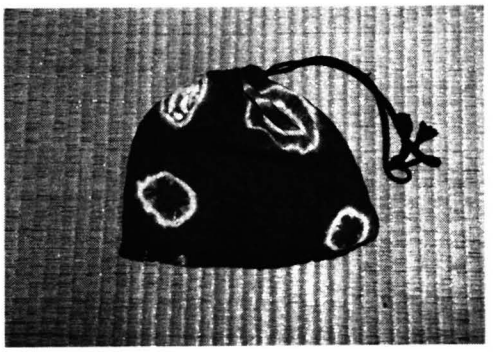
実際に子どもたちにいろんな作品をつくらせたいです。
私自身が最も気に入ったのはティシュの空き箱を使ったグラビアのコラージュ、箱作りです。思っていたよりお洒落に出来上がり、その中に、まるでガラクタの様なものをいれたのですが、そのアンバランスさがとても気に入っています。

ー小学校課程　M．H　女ー

この授業が始まる前、一体どんなことをするのだろうかとプリントを配れた時思ました。図画工作の一種だろうと　やだなあと思っていた。けれど始まってみると全然違い、今までやった事がない事でした。

一コマで作るには時間がなく、（自分がトロイのかもしれませんが）家に持って帰って作り上げたものもあったけれど結構楽しんでできました。

写真３　藍染の袋



ー小学校課程　K．Y　男ー

ティシュの空き箱を使って自分なりの箱を作ったり、始めて染色というものをし、あのような方法でこんなふうな模様ができ上がるとは知りませんでした。スチレン版画も初めてであんな簡単に版画ができるとは知りませんでした。どんな色を混ぜるとどんな色ができるのかとか知らず自分の好きな色ができた時は何だかうれしく感心しました。水彩は筆を使わずということで、私は紙の上に落として吹いたり、筆を振ったりしたのですが、まだまだ他にも方法があり、もっと自由な発想ができたらなという感じでした。

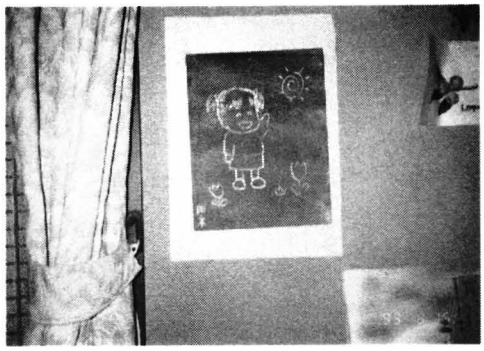
後、一週間食べ物を置いとくということで、パンをしたんですが、カビ　カビになって見るにしのびない姿となり、気分が悪くなりそうで、二度と食べ物をあんなふうにしたくないものです。

ー幼稚園課程　H．M　女ー

生活科という教材は、自分が今まで経験したことがない教科あったので、少し戸惑いがあった。けれど講義をするうちに何も考えずに創作に没頭する自分がいた。

染色では「このような技法で染めるのか」という目新しさがあった。水彩では一生懸命になってきれいな作品に仕上げようとやる気があった。夕食の残りを一週間観察することにしても最初は嫌だったが、中頃になるとどうなったか妙に気になったりもした。本当にこの講義は何も考えず楽しめる講義であったと思う。自分たちですら楽しい教科なのだから子どもたちはもっと楽しんで行うだろうと思った。しかし、楽しいだけでなく何かを得させなければいけないので教師としては大変な教科であると思った。

写真４　スチレン版画



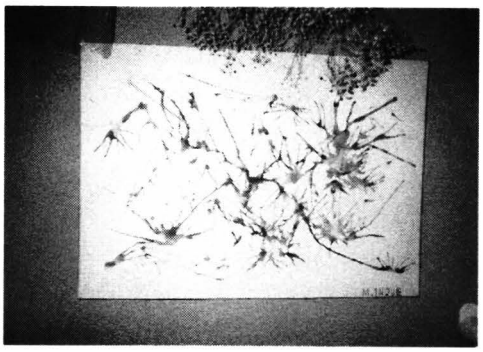
夏休みの宿題では短期間しか帰省しなかつたため、自分の実家の町という小さな範囲しか写真に撮る余裕がなかったので大変苦労した。しかし、この宿題によってあらためて自分の地元の町を振り返ることができた、ということは大変良かった。ただあまり大した所が無かったために文章紹介が難しく「客観的」となっていたけれど一部主観的になっている。ところがあると思うけれど見逃して下さい。

最初は生活のＣコースになった時　すごく嫌だなという気持ちが強かったけれど大変興味深い教材を提供してくれたので本当に楽しく講義をうけることができました。自分も今回の事を何らかの形で参考にし、実践できるような教師になれるよう努力していきたいと思います。

ー小学校課程　M．M　男ー

私は今まで図画工作が大の苦手でとても嫌いだった。だから生活の授業がＣの表現と決まったときのショックはとても大きかった。でも、講義を実際にうけてみると、どれもこれも簡単にできて、今までの図画工作の授業で必要とされてきた技術が全く必要とされていなかったのでとてもびっくりした。不器用な私なりに満足のいく作品が何個かできてうれしかった。グラビアのコラージュも箱にグラビアを貼るだけだったし、水彩も中を見てそれをかくのではなくて、好きなようにして表現すれば良いといった講義は、図画工作の授業で私が味わったことのない楽しさを味わわせてくれたと思う。

写真５　吹き絵のパネル　Ｂ２版



ー小学校課程　M．I　女ー

確かに図画工作の授業では技術が必要かもしれないけれど、そればかりだと私のように不器用な人間は図画工作っていうもの全てを嫌いになって遠ざけるようになってしまう。それはとても残念なことである。でも、この講義でとり扱われたような教材を用いれば、図画工作というものが、技術を必要とするだけのものではないことがわかり、一部分でも好きになれると思うし、作る喜び、表現する楽しさを学

ぶことができると思う。だから、図画工作の授業の最初にこのような授業をして徐々に技術を必要とするものに発展していければ、子どもたちも先入観を持たずに対応していけると思う。

この講義を私はもっと受けたい。もっといろなん物を作りたいと思っている。子どもたちにそんなふうに思われるような授業をしていきたいと思う。とても楽しい生活科の授業で、作ることの楽しさを知った。

ー小学校課程　J．A　女ー

ほとんどのレポートが生活科「表現」を図画工作のイメージでみている。そして、描いたり、作ったりする事の苦手意識を持って授業に出席しているようである。「表現」コースが他のコースに比べて選択する学生が少ないのは何が原因なのかを究明する必要があるようにも思われる。将来、教師を志望している学生がこのように、表現に対して苦手意識を持つとしたら、子どもたちに与える影響は多大である。「表現」コースは生活科の目標やねらいからできたのである。その意義は様々に考えられるであろうが、低学年子どもの活動は表現しながら思考し、思考しながら表現している。想像と創造の関係もそうであるように、幼児期から小学校低学年のもっとも顕著な特徴である。このことは「表現」の連続であるとも言える。そのような時期の子どもたちに表現に対して苦手意識もって教壇に立つ事は疑問であり、養成する立場からすれば大きな問題である。

また、コラージュや染色はほとんどの学生が楽しいと書いている。この楽しさはどう考えたらいいのだろうか。簡単にできるから楽しい。初めての経験なので楽しい。失敗がないから楽しい。使えるから楽しい。など、その理由として書いている。苦手意識が図画工作にあるとすれば、言葉を裏返せば、学生の図画工作のイメージだということができる。しかし、それほど作ることが教科と結び付くところに、日常の生活の中での作る経験の貧しいさを浮き彫りにしているともいえる。ここに、本来の生活科の必要性を感じる。

本年度の目標の一つはある程度評価できるが、あくまで高水準なものでないことは確かである。また、物と生活と「つくり」について、考察している学生はほとんど見られなかった。

5　今後の問題及びおわりに

本年度の授業は前年度の反省の上に学生の作る体験の不足を念頭に、作ることへの興味や関心が少しでも向上することを目標にした。そして、身近な素材を選択したり、作る楽しさだけでなく、それらを使う楽しみや、飾る楽しみなどのを体験することに終始した。そして、物、自分、「つくり」という関係の中で生活科の意義を考えることができれば一応の評価ができると考えた。学生の授業での活動はかなり楽しいものであり、作った物はそれぞれの生活の中で生かされているようであった。特に、小箱や染色した布は生活の一部として利用されていたようである。

しかし、学生のレポートにもあるように、今回の授業が図画工作と一体になって学生達に生活科を理解させることになったことは、問題であり、生活科と図画工作との相違を明確に理解出来なかった点は今後の課題と言える。また、身近で手軽な素材に固執したために、自然の素材を利用しなかったことは反省すべき点として残った。また、学生の「つく

り」と生活科がどのように結び付くのかについても疑問が残っている。

前年度のように新たな授業への挑戦を今回はひかえ、授業時間内で一応完結するように努力した。その結果学生が、主体的に授業に参加したり、授業の中で創造的な活動が十分できたかは疑問である。教師の側からすれば、教材研究が行き届き、支障無く終わる授業は、無味乾燥な充実感を味わいかねない。生活科の授業は子供達に評判がいいと先生は言う。しかし、時間や空間を超越して活動が始まるために、常に中途半端な感じが残る授業になってしまうとも言う。このことは、生活科によって生じた新たな問題である。時間と空間を超越する子どもの姿を学校社会の中でいかに認めていくか、あるいは新たな対策をしていくことが必要である。

大学教育でもしかりである。今回自然の素材を使用しなかった反省はここにあるといってよい。例えば染色にしてもそうである。授業時間内で行うために市販の染料を使用せざるをえない。このことで藍という植物がどのような植物であるのか、染料の製作行程、布の製作行程、布と染料の関係などを一切問題できない。また、生活との関連や、自分と布の関係、加工、といった問題も十分検討することはない。しかし、その過程に含まれる膨大な知識や知恵は人間が作り出したものであり、生活科の教材はその全てを対象にするべきであようにに思われる。膨大の情報とイメージが先行する中で我々は体験から学ぶこと、自然から学ぶ事を忘れがちである。時間や空間を超越した教材作りが今後の課題であろう。

参考文献

・佐藤登他　コース制にした「初等科生活」の授業　ー山口大学教育学部の場合ー　教科教育学研究　第12集　第一法規　1994
・石川正一・川口政宏　生活科における「つくり」の意義　I　山口大学教育学部研究論叢　第42巻　第３部　1992
・石川正一・川口政宏　生活科における「表現」の教材について　I　山口大学教育実践指導センター研究紀要　第５号　1994
・高橋誠一朗　’93染色の基礎知識　染色と生活社　1994
・岩田弥富　幼児絵画製作の指導法　ー理論と実際ー　芸大出版会　1973
・中野重人　生活科教育の理論と方法　東洋館出版社　1990
・文部省　小学校指導書　生活編　教育出版　1990